7

母娘順礼

学習した日　月　日

「さぁ、そろそろ行こうか。」

今日は、あたたかな春の日。そして、大好きな母と二人で権現堂堤の桜を見に行く日。わたしたちは手をつないで出かけた。権現堂堤は、今年も桜を見に来ている大ぜいの人たちでにぎわっている。桜が満開にさくころ、母と私のこう例となったお花見はわたしの春の楽しみである。

そして、桜のほのかなかおりをのせた風を感じながら、〈順礼の碑〉の前で母が語ってくれるあの話も、わたしの心の中に残っている……。それは、昔から語りつがれている母娘順礼の物語。

昔、権現堂川は、あばれ川としておそれられていました。その川を守る権現堂堤は江戸を守る大切な堤でした。堤がきれると江戸の町が水に沈むといわれたほどでした。

享和二年（一八〇二年）六月、長雨が続き、とうとう堤がきれ、何度しゅう理しても大雨がふりだすと、すぐにまたきれてしまうというありさまでした。きれ口は、どんどん広がり四百メートルもの長さになってしまい、近くの村人たちまでが堤をきずく工事にかりたてられることになりました。ふり続く雨と流れるだく流は、人々の願いや努力をあざ笑うかのようで、土手の修復はうまく進みません。

その日も村人は、堤奉行の指図にしたがってくい打ちをしています。毎日続く、むずかしい工事にみなつかれきって、もう口をきく元気さえありませんでした。この日も間もなくくれようとするころ、堤の上を母親と娘の順礼が通りかかりました。

「みなさん、本当にごくろうさまです。」

母親は、工事をしている人にやさしく言葉をかけ、堤のきれ口をしばらくのぞきこんでいましたが、

「このようにたびたび堤がきれるのは、龍神のたたりかもしれません。人ひとりが人身御供（神のいかりをしずめるために人間を神にそなえること）にならなければ、この堤をきずくことはできますまい。」

と、つぶやくように言いました。これを聞いた堤奉行は、
「だれか人柱に立つ者はおらんか。」
と、大声で村人に呼びかけました。しかし、村人は互いに顔と顔を見合わすだけで、だれも声を出しませんでした。強く降りしきる雨音とゴウゴウと流れるだく流の音だけが、夕ぐれの中にひびいていました。だく流は、村を飲みつくすように流れています。静かな時間は、どのくらいたったでしょうか。
しばらくして、母親は、堤奉行に申し出ました。
「よろしゅうございます。わたしがその人柱になってみなさんをお救いいたしましょう。」
そういうと、母親は、念仏をとなえたあと、あっという間にうずまく流れの中に飛びこみました。そして、これを見た娘も母のあとを追ってたちまち流れの中に消えていきました。いっしゅんの出来事です。
すると、不思議なことにみるみるうちに水がひいていきました。
それからはあのむずかしかった工事も順調に進み、堤をきずくことができたのです。

それからのち、この母娘の順礼を供養し、この出来事を後世の人に伝えようと堤の上に〈順礼の碑〉が建てられたのでした。
晴れ晴れとした青空のもと、今日も大ぜいの人々が桜を楽しんでいる権現堂堤。〈順礼の碑〉のそばをときおりふく風が桜の花びらをのせて通りすぎていきます。

● この話をとおして、心に残ったことや大切にしたいことを書いてみましょう。